

「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査報告書の概要

1、目的

男女共同参画社会の実現は、女性にとっても男性にとっても生きやすい社会を作ることであり、性別により役割を固定的に考える「固定的性別役割分担意識」の解消を目指している。このため、男性自身の男性に関する固定的な性別役割分担意識についての調査研究を行い、男性にとっての男女共同参画を効果的に推進するための方策を検討することを目的とする。

2、調査の概要

(1) 調査研究会の概要

座長

伊藤 公雄 京都大学大学院文学研究科教授

委員（五十音順）

石蔵 文信 大阪大学大学院医学系研究科 准教授

加藤 千恵子 東洋大学総合情報学部 准教授

羽下 大信 甲南大学文学部 教授

吉岡 俊介 オフィスよしおか シニア産業カウンセラー

吉田 千鶴 関東学院大学経済学部 教授

第1回：平成23年 9月 7日（水）

第2回：平成23年10月21日（金）

第3回：平成23年12月12日（月）

第4回：平成24年 2月14日（火）

第5回：平成24年 3月14日（水）

(2) 調査の内容

①WEB調査

男性の性別役割分担意識に関する実態と、男性が抱えやすい日常生活の意識・行動との関連性を検討するため、WEB調査を実施した。男性がどのような性別役割分担意識を持っているのかを把握し、そのような意識が男性の日常生活の意識・行動といかに関連しているのか、またそのような意識の形成に関連する要因について分析した。なお、男性の回答を補完する目的から、女性調査も実施している。

②グループインタビュー調査

男性の性別役割分担意識に関するWEB調査結果と既存調査の結果を受け、男性の性別役割分担意識や男性の日常生活の意識・行動との関連等、具体的な実態を把握し、どのような支援が有効であるかを把握するため、グループインタビュー調査を実施した。

③既存資料の調査

男性の性別役割分担意識や男性を取り巻く日常生活の意識・行動に関して分析された既存調査等を収集し、男性の性別役割分担意識との関連性について考察した。

(3) 調査委託機関

本調査は、いずれも内閣府が日本 PMI コンサルティング株式会社に委託して実施した。

3、調査のポイント

- 男性の役割分担意識に関する意識を「5つの志向性」に分類した
- 「5つの志向性」の度合いと、日常生活の意識・行動（夫婦の会話、育児参加など）と志向性との関連性が明らかになった

※主にインターネット調査（男性 3000 人、補足的に女性 3000 人）

(1) 男性の役割分担意識に関連する「5つの志向性」とその度合い等について

主導権役割志向 男女の関係性において重要事項を決めるのは自分であるという志向性（3～5 ページ）

- ・「家事は主に妻にしてほしい」と回答した男性は全体の5割。年代が高くなると増加し、既婚60歳代では6割強。女性にも同様の役割分担を肯定する回答が多く、女性全体の約6割が「家事は主に自分がした方がよい」と回答。
- ・「妻や恋人には自分の意見に従ってもらいたい」と回答した男性は全体の3割強。男性の収入が高いと肯定する者が増加し、妻の収入が高いと否定する者が増加。

経済的役割志向 家族を経済的に支えるのは自分で、妻が働くことは期待しない志向性（5～7 ページ）

- ・「家族のために仕事は継続しなければならない」と回答した男性は全体の8割弱。同様の役割を男性に期待する女性も全体の8割と多い。
- ・「妻にはできるだけ稼いでもらいたい」と回答した男性は全体の2割弱、否定的な回答は3割強。男性の収入が増加するほど否定する者が増加し、妻が働くことに期待しない傾向がみられる。一方、女性では「自分もできるだけ稼ぎたい」との回答が多く、全体の5割弱である。

社会的役割志向 仕事の業績を評価されたい、社会的に活躍したいという志向性（8～10 ページ）

- ・「仕事で業績を上げ評価されたい」と回答した男性は全体の6割強。女性では7割強が夫に対し同様の期待を持つ。年代が高くなると肯定する男性は減少するが、女性ではあまり減少せず、男女の意識ギャップが見られる。
- ・「仕事では競争に勝ちたい」と回答した男性は4割強。労働時間が長くなるほど強く肯定する者が増加する。

私的感情の抑制志向 悩み相談や弱音などプライベート感情を見せない志向性（10～12 ページ）

- ・「悩みがあれば気軽に誰かに相談する」と回答した男性は全体の2割弱。未婚の方が否定する者がやや多く、年代が高くなると肯定する者が減少し、まわりにプライベートな感情を見せない傾向がみられる。女性全体の約6割が「夫には悩みがあれば気軽に誰かに相談してほしい」と回答。

日常生活依存志向 家事など生活全般を妻に依存し、自分がやることを避ける志向性（12～13 ページ）

- ・「家族の洗濯物を干すことは自分のすることではない」と回答した男性は全体の1割強、6割弱が否定的な回答。

(2) 日常生活の意識・行動と男性の役割分担意識に関連する「5つの志向性」等の関連について

- ・ 夫婦間の会話の頻度が高い場合に見られる傾向（14～15 ページ）
「主導権役割志向」や「日常生活依存志向」、「私的感情抑制志向」が低い
「何もやる気がしない」「死にたい」などと感じることが少ない
- ・ 子どもの世話の頻度（育児参加）が高い場合に見られる傾向（15～17 ページ）
「主導権役割志向」や「日常生活依存志向」が低く、「社会的役割志向」が強い
妻が「自営（農林水産）」「正社員」「公務員・公社等の正規職員」の場合、子どもの世話の頻度が高い
- ・ 「仕事をやめたい」と感じたことについて見られる傾向（17～18 ページ）
「収入」が低くなるほど、また「労働時間」が長くなるほど、「あった」とする回答が増加する
- ・ 「何もやる気がしない」と感じたことについて見られる傾向（18～19 ページ）
「経済的役割志向」が弱くなるほど「あった」とする回答が増加する
「収入」が低くなるほど、また「労働時間」が長くなるほど、「あった」とする回答が増加する

4、結果の概要

(1) 男性の固定的性別役割分担意識に関する意識（5つの志向）

男性の固定的役割分担意識に関連すると思われる質問項目を、因子分析により抽出された5つの因子に分類している。

(2) 男性の固定的性別役割分担意識（5つの志向）の傾向

① 主導権役割志向

男女の関係性において重要事項を決めるのは自分であるという志向性

このような意識は、全般的に、未婚者よりも既婚者に強い。また、男性の収入が高いと強まり、妻の収入が高いと弱まる傾向が見られる。

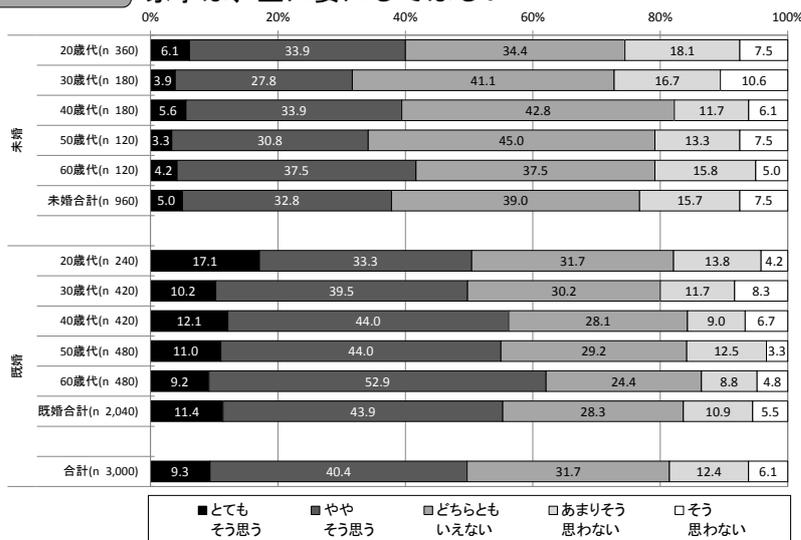
・「家事は主に妻にしてほしい」

そのような役割期待を男性の5割が抱いている。未婚より既婚に強く、年代が高くなると強まる傾向にあり、既婚60歳代では6割強に上る。男性の収入が高くなると強まり、妻の収入が高くなると弱まる傾向にある。

なお、女性において「家事は主に自分がした方がいい」との回答は約6割に上る。

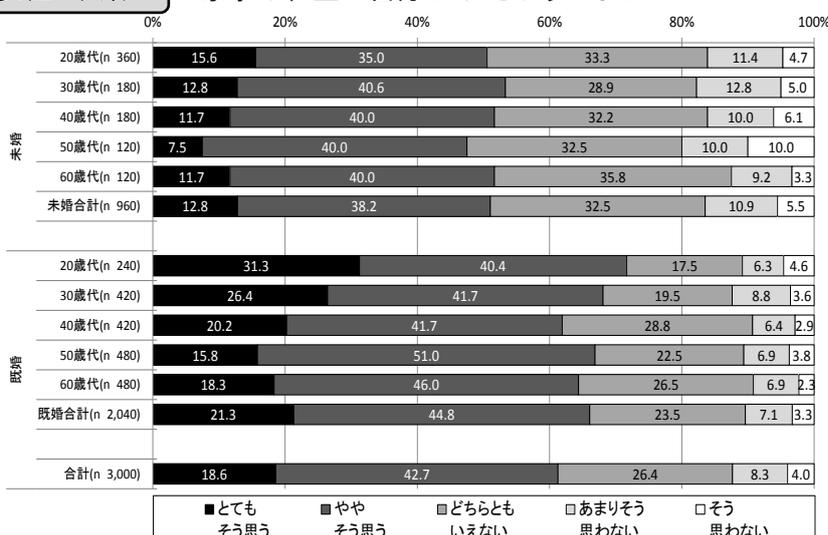
男性の回答

家事は、主に妻にしてほしい

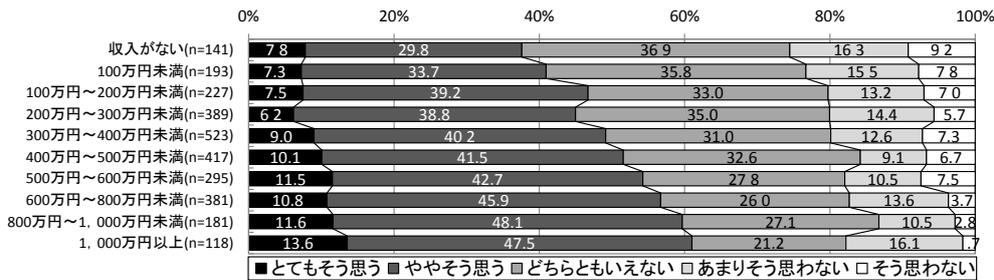


女性の回答

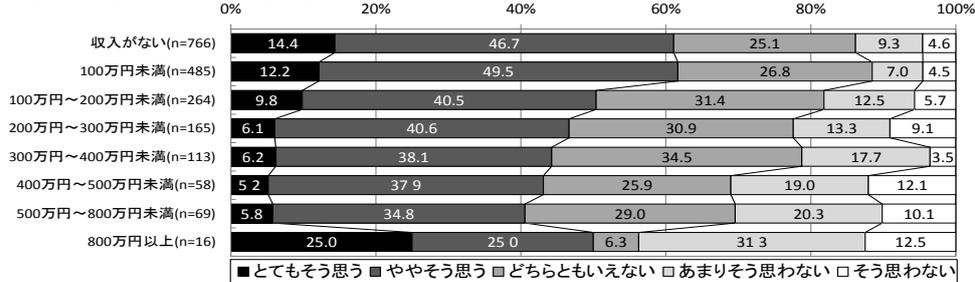
家事は、主に自分がしたほうがよい



「家事は主に妻にしてほしい」 男性の収入別



「家事は主に妻にしてほしい」 妻の収入別

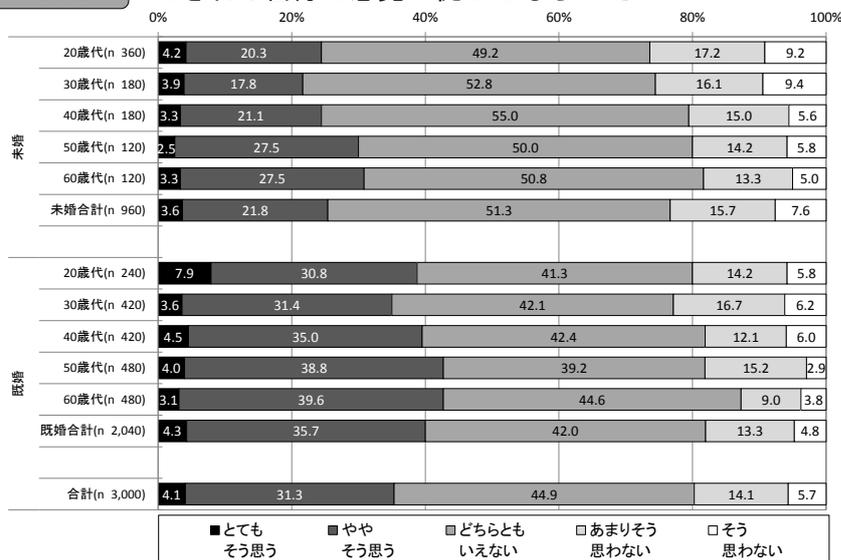


・「妻や恋人には、できれば自分の意見に従ってもらいたい」

男性全体の3割強が肯定しており、未婚者よりも既婚者に肯定する者が多い傾向がみられている。また、収入との関連がみられており、男性の収入が高くなるほど肯定する者が増加する傾向がみられているが、既婚者の場合に妻の収入が高くなるほど、否定する者が増加する傾向がみられている。なお、女性調査の結果において、「自分は夫の意見に従うほうがよい」という意識は男性に比べて少なく、婚姻状況にかかわらず約2割にとどまる。

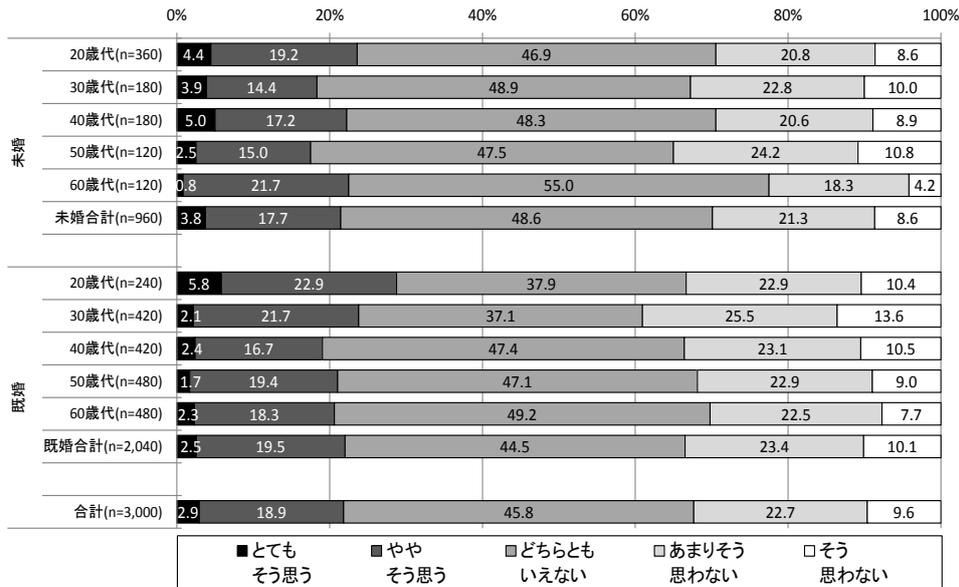
男性の回答

できれば自分の意見に従ってもらいたい

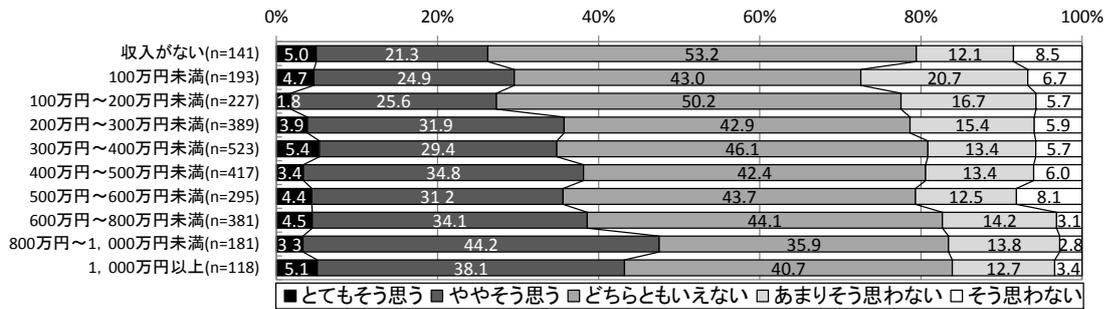


女性の回答

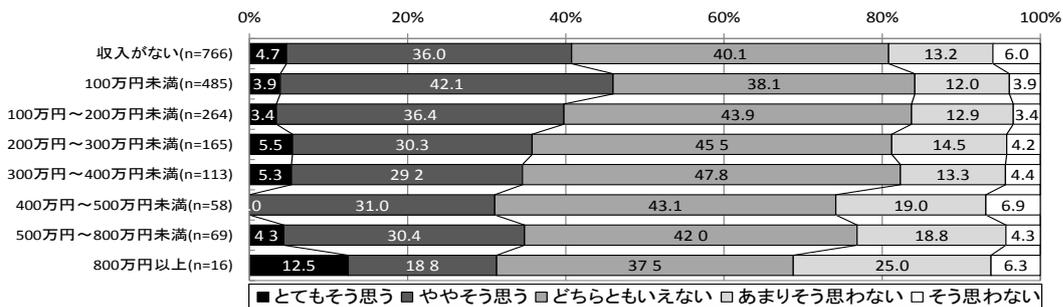
自分は、夫の意見に従うほうがよい



「できれば自分の意見に従ってもらいたい」 男性の収入別



「できれば自分の意見に従ってもらいたい」 妻の収入別



② 経済的役割志向

家族を経済的に支えるのは自分で、妻が働くことは期待しない志向性

夫が稼ぐ重要性に関する意識は全般的に強いが、妻の収入が高くなると、少し低くなる傾向が見られる。なお、女性調査でも、夫が稼ぐ重要性に関する意識は強い。

一方、妻が稼ぐことに期待する意識については男女に差が見られる結果となった。

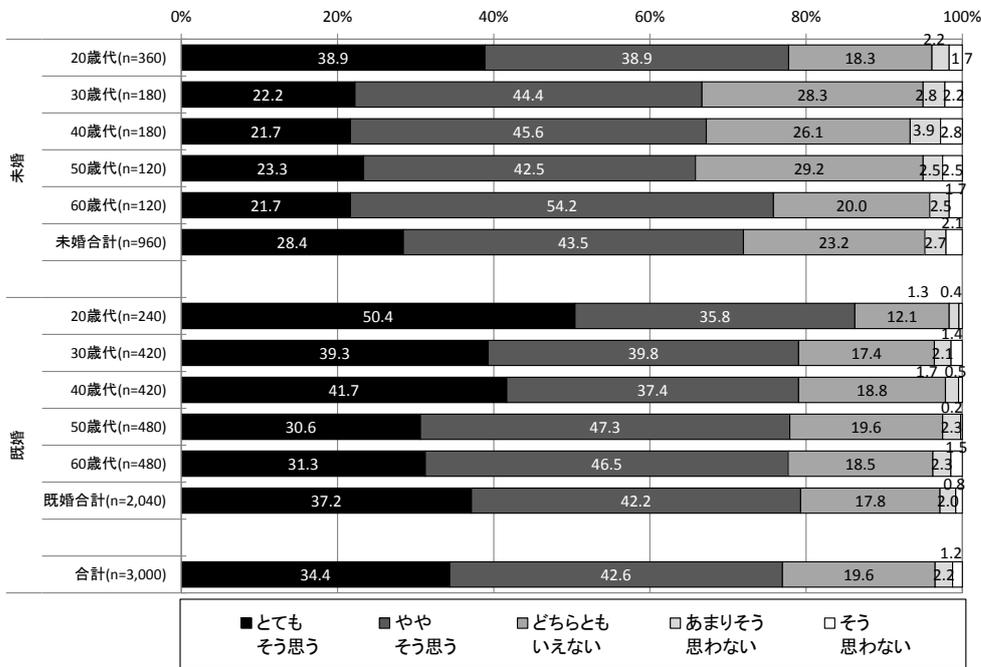
・「(結婚したら) 家族のために仕事は継続しなければならない」

このような意識は男性全体の 8 割弱が肯定しており、未婚より既婚の方が肯定する割合が高い。既婚では 20~40 歳代、未婚では 20 歳代で、「とてもそう思う」と回答した割合が高い。

なお、女性では全体の 8 割が肯定的であり、特に既婚者で肯定する割合が高い。

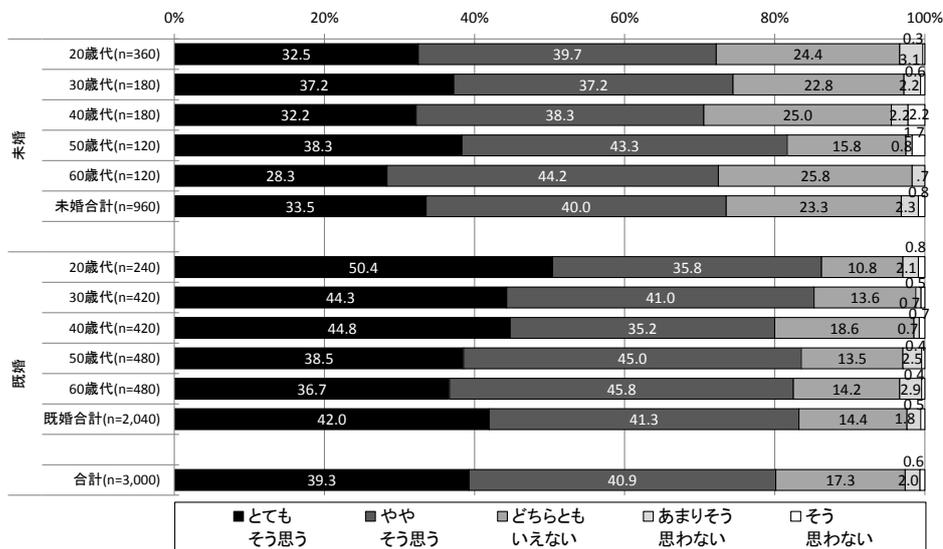
男性の回答

(結婚したら) 家族のために、仕事は継続しなければいけない



女性の回答

(結婚したら) 夫は家族のために、仕事は継続しなければいけない



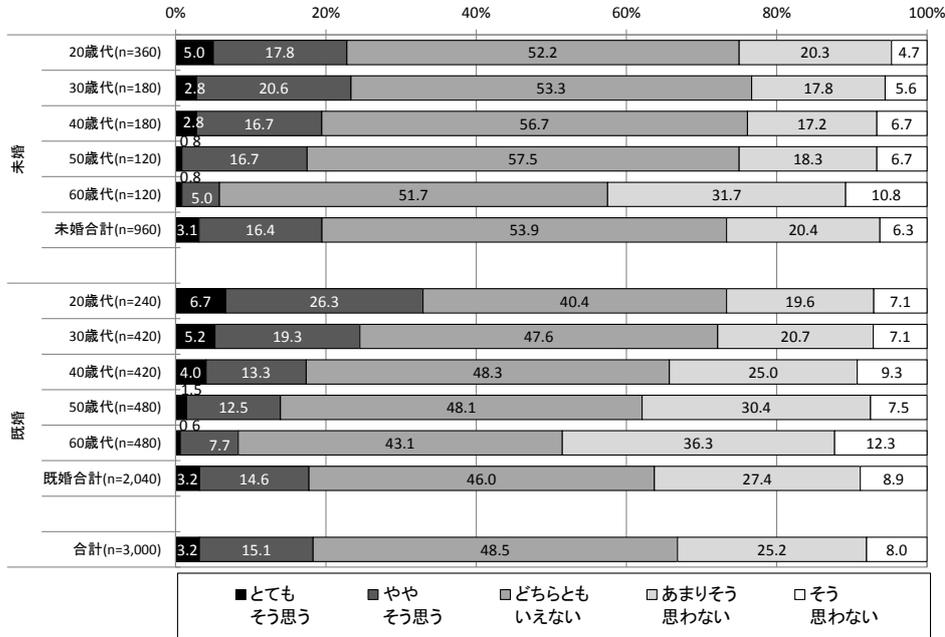
・「(結婚したら) 妻にはできるだけ稼いでもらいたい」

このような役割期待は男性全体の2割弱が肯定している一方、否定する者は3割を超える。特に既婚者においては年代が高いほど肯定する者が減少する一方、男性の収入が増加するほど否定する者が増加し、妻に働くことに期待しない傾向が見られる。

なお、女性においては「(結婚したら) 自分もできるだけ稼ぎたい」との回答は5割弱に上る。

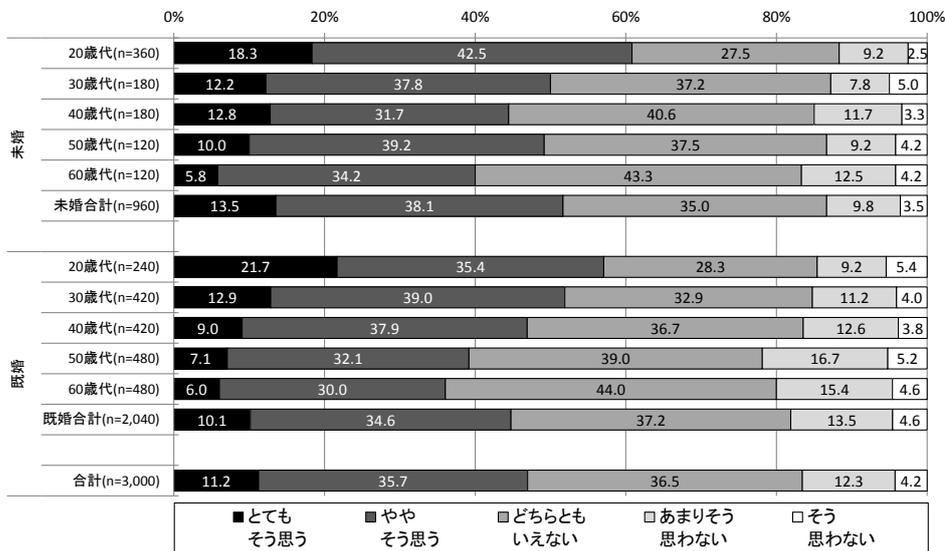
男性の回答

(結婚したら) 妻には、できるだけ稼いでもらいたい

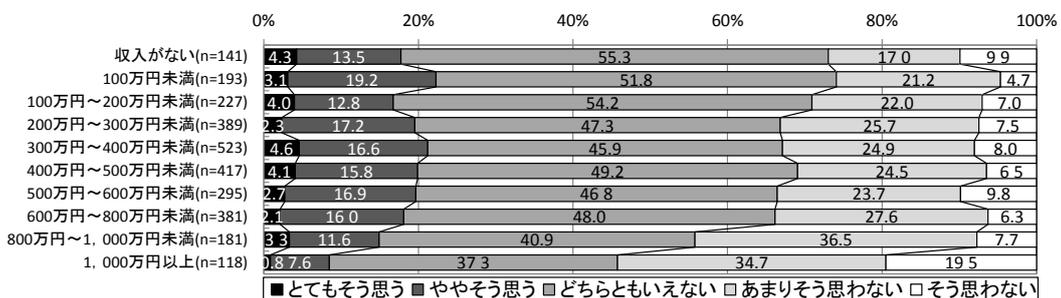


女性の回答

(結婚したら) 自分もできるだけ稼ぎたい



「(結婚したら) 妻には、できるだけ稼いでもらいたい」 男性の収入別



③ 社会的役割志向

仕事の業績を評価されたい、社会的に活躍したいという志向性

年代が低いほど肯定する者が多く、年代が高くなると否定する者が増加する傾向が見られる。

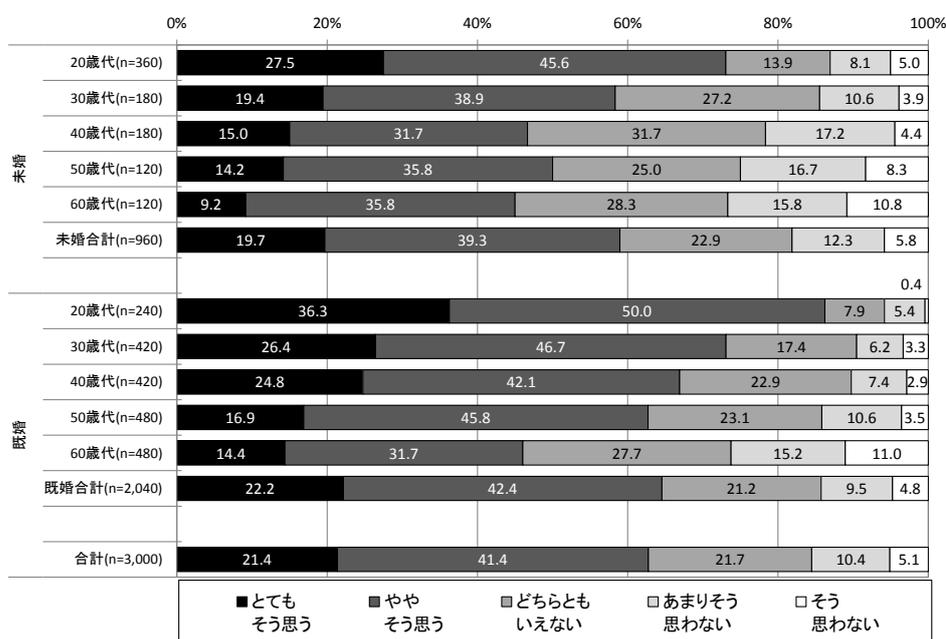
・「仕事で業績を上げ評価されたい」

男性全体の6割強が肯定しており、未婚者より既婚者に肯定する者が多い。年代が高くなると肯定する者が減少する傾向があり、既婚60歳代では4割半ばに低下する。職種別では「専門知識を活かした仕事」「管理的な仕事」「営業・販売の仕事」において肯定する者が多い。

なお、女性においても7割強が男性に対して同様の期待を持ち、年齢が上昇しても肯定する者があまり減少しない。このため、年代の高い層において男女の意識ギャップが見られる。

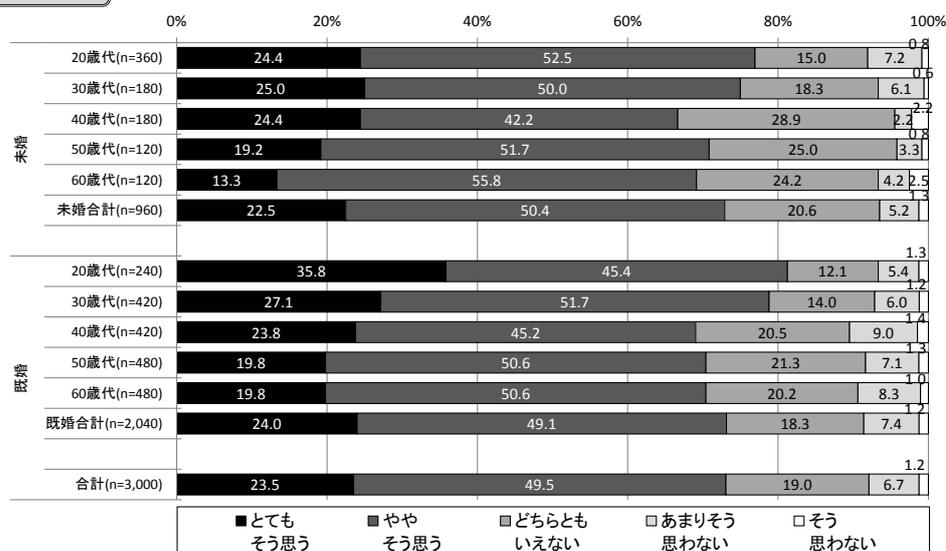
男性の回答

仕事で業績を上げ評価されたい

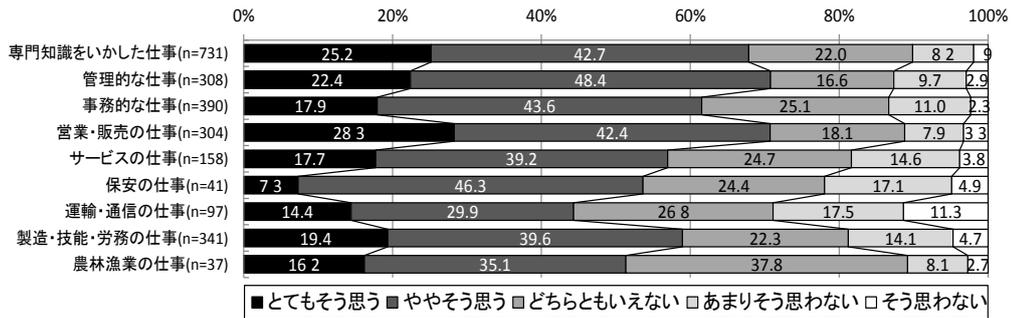


女性の回答

夫には仕事で業績を上げ、評価されてほしい



「仕事で業績を上げ、評価されたい」 男性の職種別

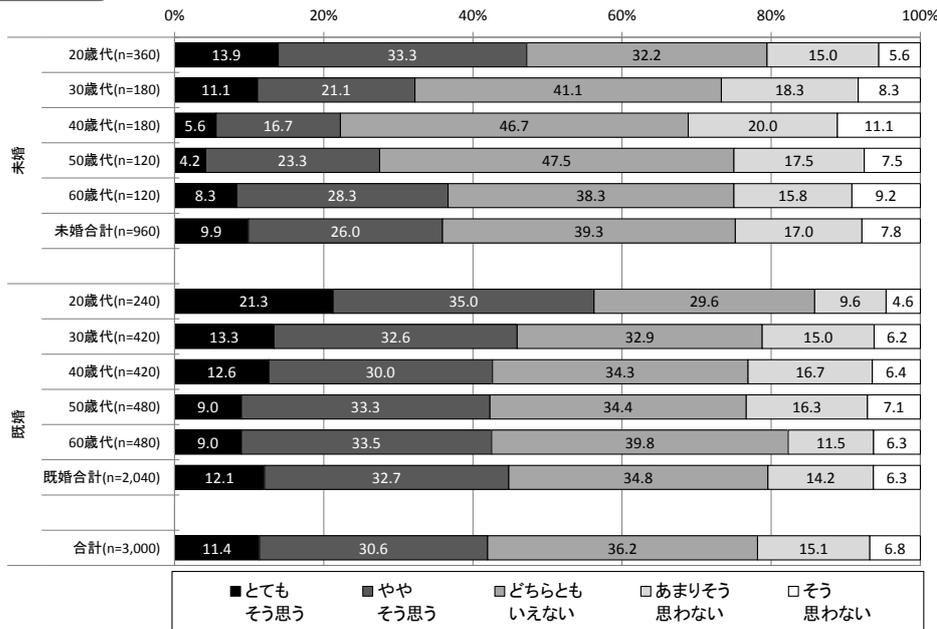


・「仕事では競争に勝ちたい」

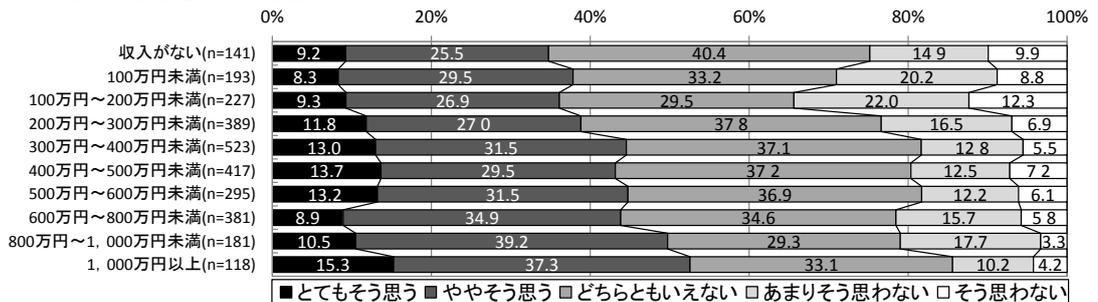
男性全体の4割強が肯定している。未婚者より既婚者に肯定する者が多い。年代別では、20歳代では婚姻状況に関わらず肯定する者が多く、未婚者では30～50歳代に肯定する者が少ない。

なお、収入や労働時間による差異もみられており、収入が高くなるほど肯定する者が増加する傾向が示され、労働時間が長くなるほど強く肯定する者が増加する傾向が示されている。職種による差異がみられており、「専門知識をいかした仕事」「管理的な仕事」「営業・販売の仕事」「サービスの仕事」「農林漁業の仕事」の場合に、肯定する者が多い傾向が示されている。

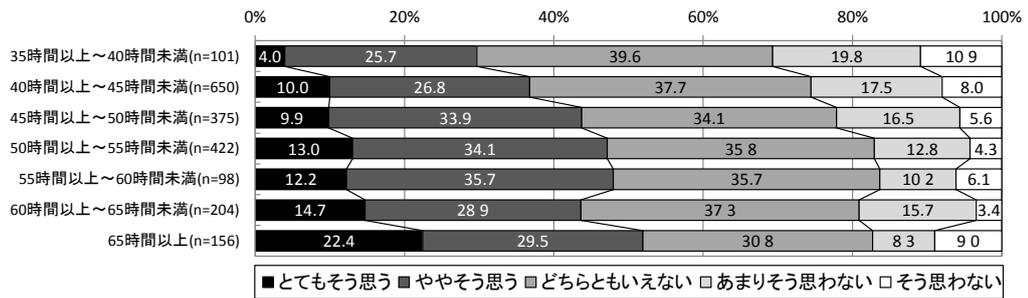
男性の回答 仕事では競争に勝ちたい



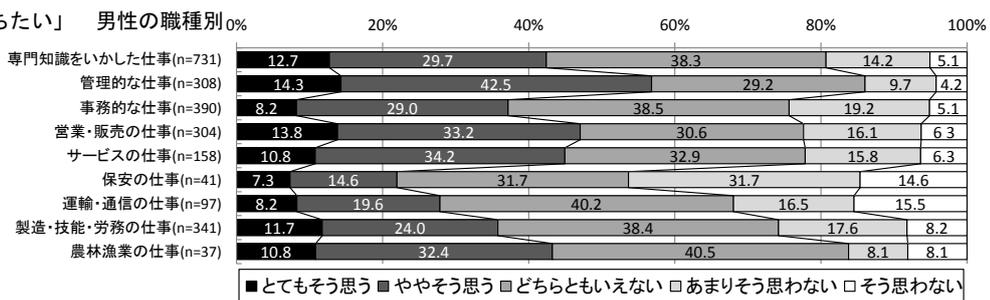
「仕事では競争に勝ちたい」 男性の収入別



「仕事では競争に勝ちたい」 労働時間別



「仕事では競争に勝ちたい」 男性の職種別



④ 私的感情抑制志向

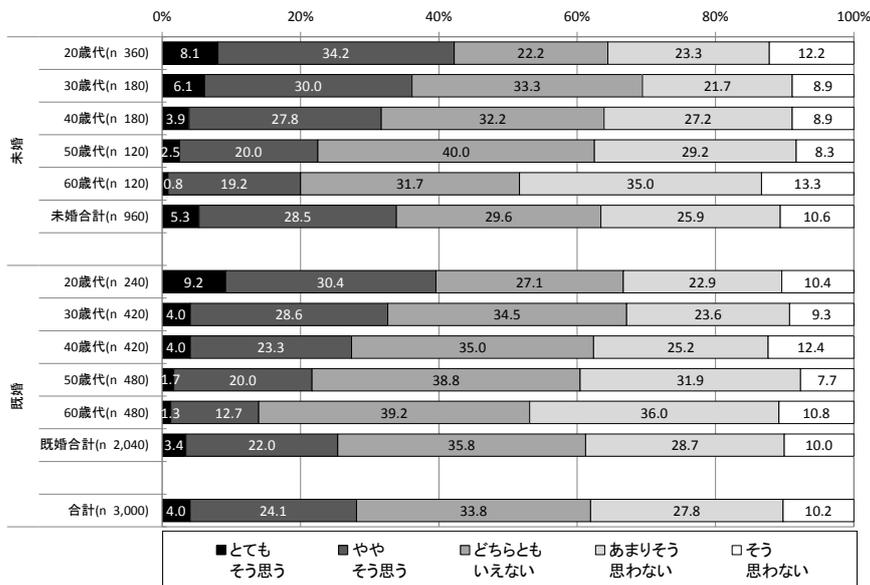
悩み相談や弱音などプライベート感情を見せない志向性

年代が低いほど感情を抑制しない者が多く、年代が高くなるほど感情を抑制する傾向が見られる。なお、女性においては、感情を抑制してほしくないという意識が男性に比べて高い傾向が見られる。

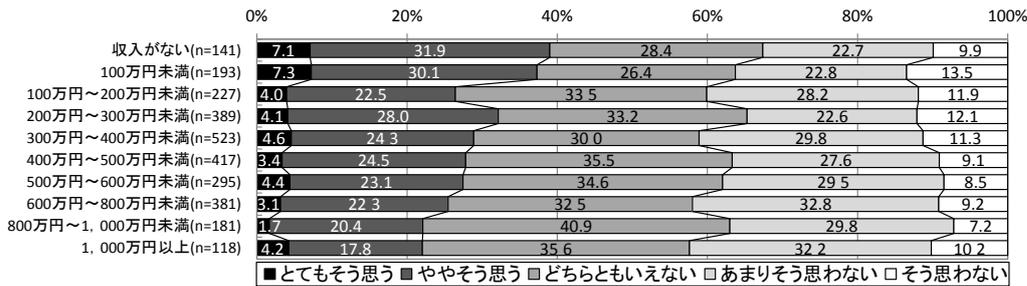
・「他人に弱音を吐くことがある」

肯定する者は、男性全体の3割弱にとどまっている。婚姻状況別に顕著な差異はないものの、年代別にみると、年代が低いほど肯定する者が多い傾向が見られる。収入との関連がみられており、収入が増加するほど肯定する者は減少する傾向が見られる。

男性の回答 他人に弱音を吐くことがある



「他人に弱音を吐くことがある」 男性の収入別

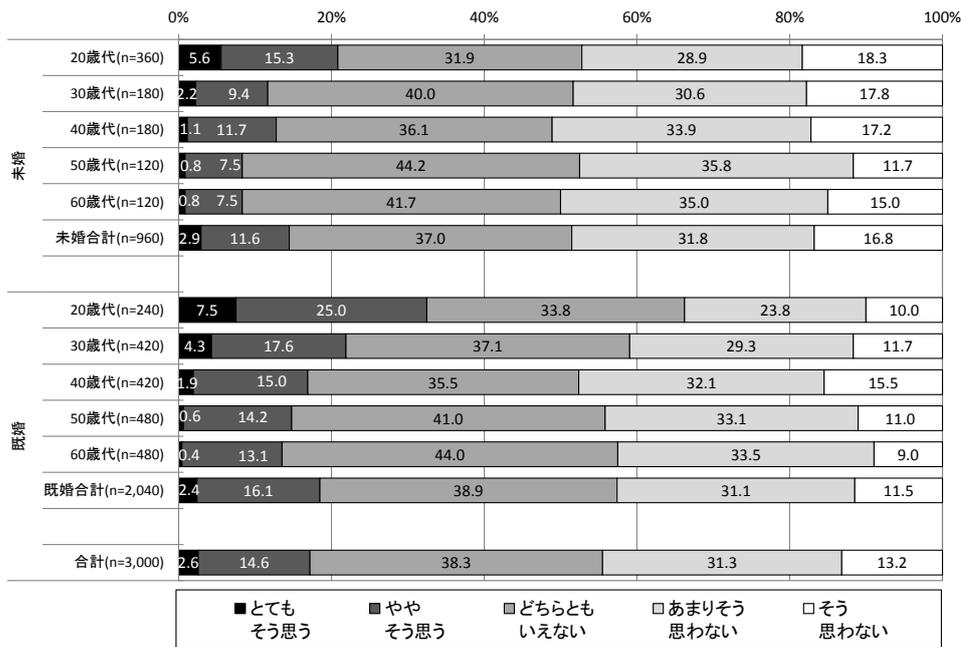


・「悩みがあったら、誰かに気軽に相談するほうである」

男性全体で、肯定する者は2割弱にとどまっている。未婚者の方が否定する者がやや多く、特に未婚の50歳代、60歳代においては肯定する者が1割に満たない。年代が低いほど肯定する者が増加し、年代が高いほど肯定する者が減少し、まわりにプライベートな感情を見せない傾向が見られる。

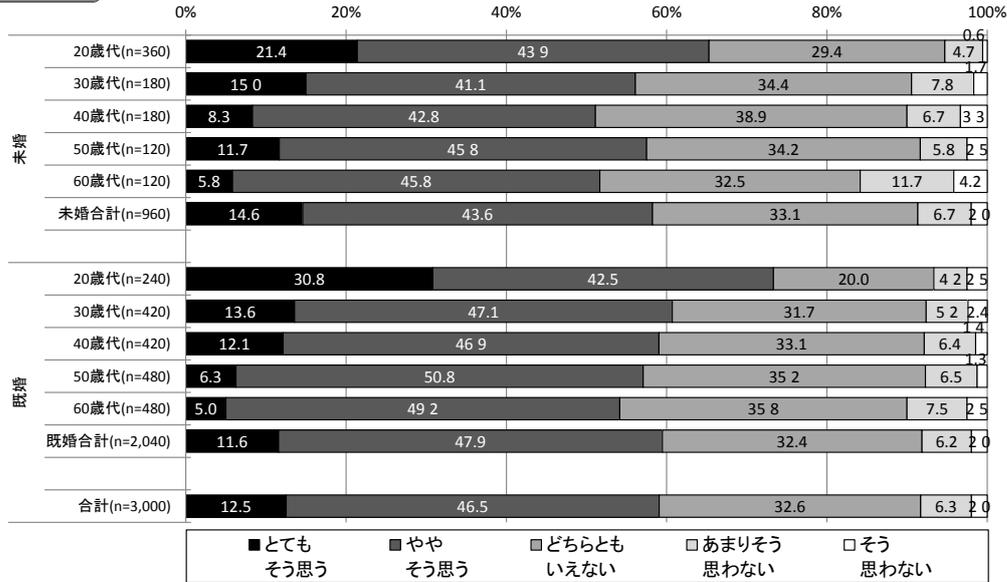
なお、女性においては、「夫には、悩みがあったら誰かに気軽に相談してほしい」とする回答は全体の約6割に上っている。

男性の回答 悩みがあったら、気軽に誰かに相談するほうである



女性の回答

夫には、悩みがあったら、気軽に誰かに相談してほしい



⑤ 日常生活依存志向

家事など生活全般を妻に依存し、自分がやることを避ける志向性

質問への回答としては全般的に否定的な者が多く、買い物や洗濯について、男性は抵抗がない傾向が見られる。既婚者においては、妻が「公務員・公社等の正規職員」「正社員」などの場合には否定する（依存しない）割合が高い。

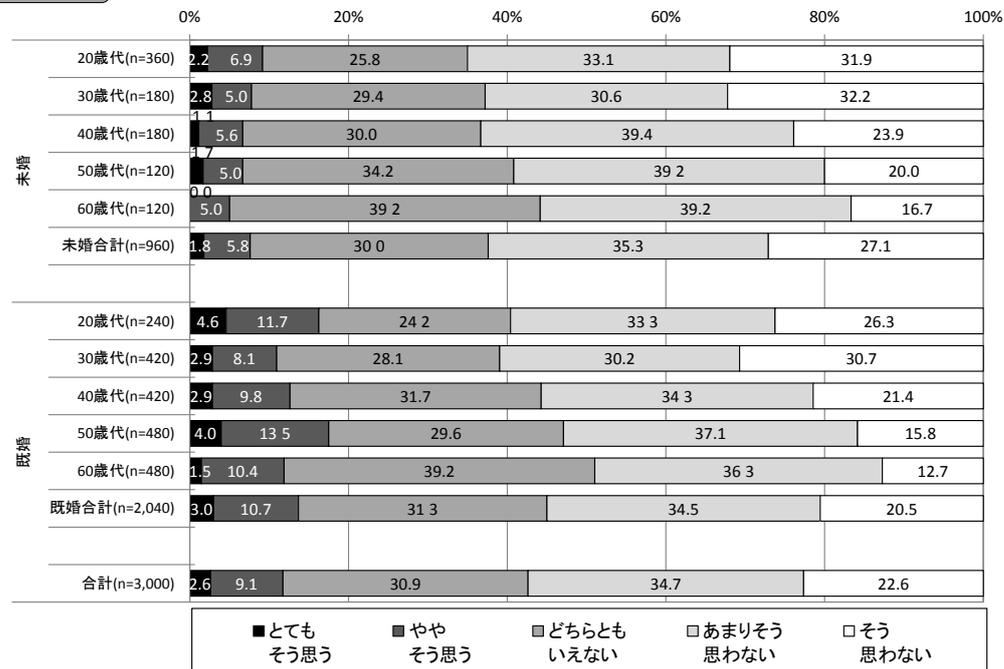
・「家族の洗濯物を干すことは、自分のするような仕事ではない」

このような意識を肯定するのは、男性全体で1割強にとどまる一方、6割弱が否定している。年代が高くなるとともに、否定する者がやや減少する傾向が見られる。なお、既婚者の場合、妻の就業形態による差異がみられており、妻が「公務員・公社等の正規職員」「正社員」「非正規雇用者」の場合には否定する者が多い傾向にある。

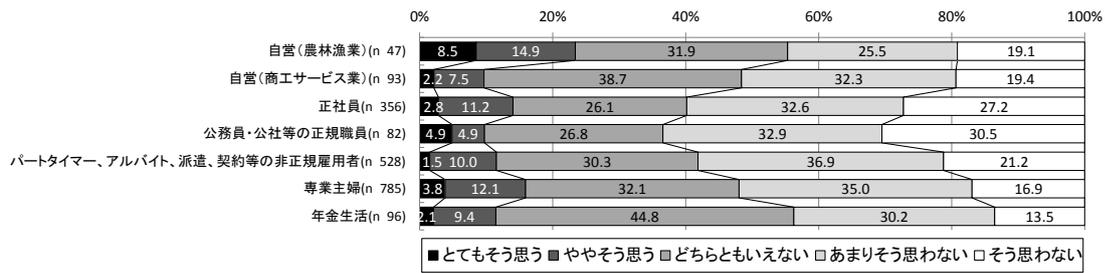
なお、家族と同居する男性に、実際に洗濯物を干すことがあるかどうかを聞いたところ、ほとんどしないと回答した者が全体の3割強に上っている。

男性の回答

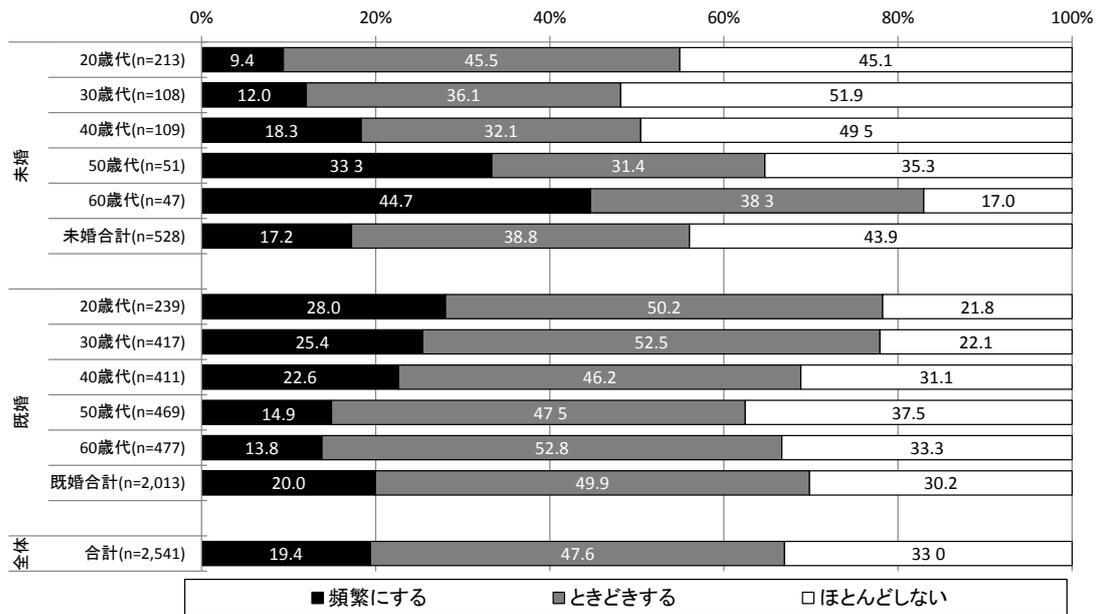
家族の洗濯物を干すことは、自分がするような仕事ではない



「家族の洗濯物を干すことは、自分がするような仕事ではない」 妻の就業形態別



男性自身が、家族の洗たくものを干すことがあるかどうか（年代・婚姻状況別）



(3) 男性の性別役割分担に関する意識 (5つの志向) に影響を及ぼす要因

男性の性別役割分担に関する意識に影響を及ぼす要因について、5つの志向別に調査した。結果は以下のとおりである。

【影響の大きい順に記載】

	影響を及ぼす要因 (既婚・有職者)	影響を及ぼす要因 (未婚・有職者)
主導権役割志向	・配偶者の意識 (+) ※ ・親の意識 (+) ・職場の意識 (+)	・親の意識 (+) ・職場の意識 (+)
経済的役割志向	・配偶者の収入 (-) ※ ・親の意識 (+) ・男性の収入 (+)	・職場の意識 (+) ・親の意識 (+)
日常生活依存志向	・配偶者の意識 (+) ・配偶者の収入 (-)	
社会的役割志向	・男性の年齢 (-) ・配偶者の意識 (+) ・親の意識 (+) ・管理的な仕事 (+) ・営業・販売の仕事 (+) ・専門知識をいかした仕事 (+)	・男性の年齢 (-) ・親の意識 (+) ・職場の意識 (+)
私的感情の抑制志向	・男性の年齢 (+)	・職場の意識 (-)
性別役割に対する規範意識	・配偶者の (+) ・職場の意識 (+) ・親の意識 (+)	・職場の意識 (+) ・親の意識 (+)

※ (+) の例：配偶者の意識が高いほど男性の主導権役割志向も高い
(-) の例：配偶者の収入が高いほど男性の経済的役割志向は低い

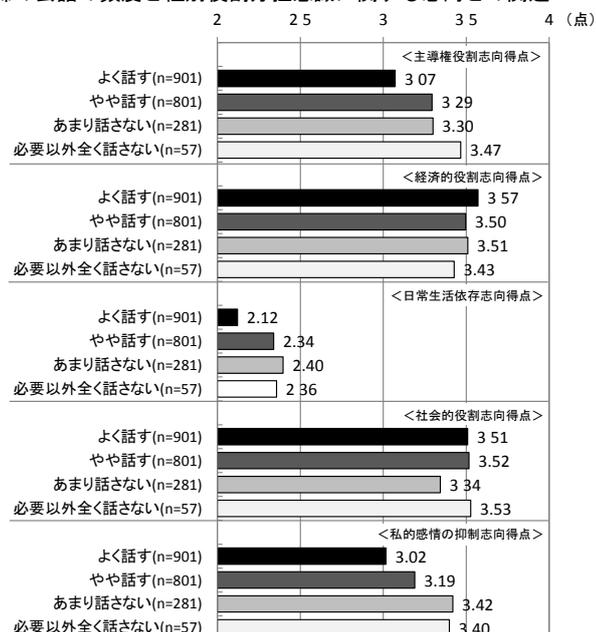
(4) 日常生活の意識・行動との関連 ※報告書の章立てとは一部異なります

① 夫婦や恋人間のコミュニケーションについて

夫婦間の会話の頻度

・妻とよく話す男性は、全く話さない者に比べ、「主導権役割志向」、「日常生活依存志向」、「私的感情の抑制傾向」が低い傾向が示されている。

男性の夫婦の会話の頻度と性別役割分担意識に関する志向との関連



(得点化の方法)

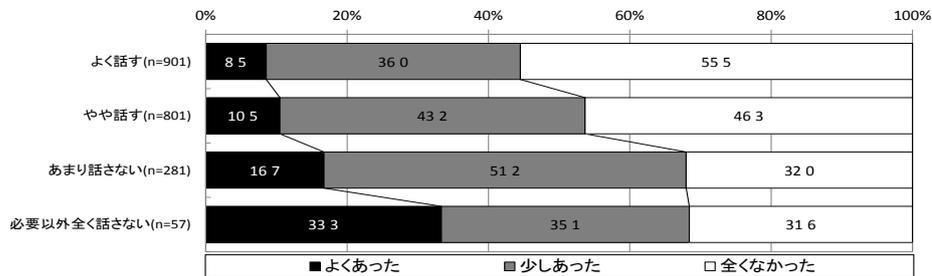
それぞれの志向に対応する質問項目 (20ページ参考図表) について 5段階 (「とてもそう思う (5点)」「ややそう思う (4点)」「どちらともいえない (3点)」「あまりそう思わない (2点)」「そう思わない (1点)」) により、得点化を行った。

なお、逆転項目として設定していた5項目 (20ページ参考図表中、※のついている項目) については、点数を逆転させて (「とてもそう思う (1点)」～「そう思わない (5点)」) として得点化している。

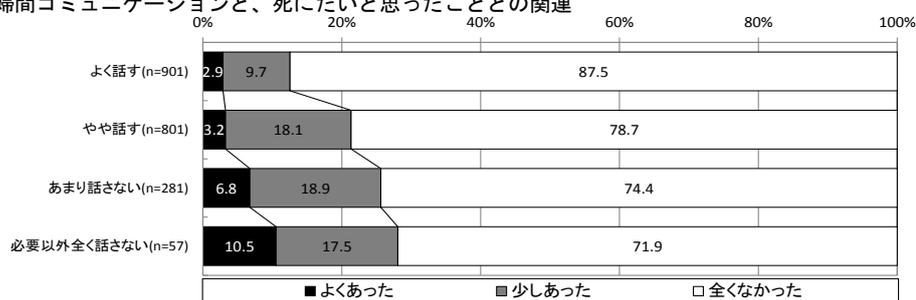
夫婦間の会話と何もやる気がしない、死にたいと思うこととの関連

・妻とよく話す男性は、全く話さない者に比べ、「何もやる気がしないと感じたこと」、「死にたいと思ったこと」が少ない傾向が見られている。

夫婦間コミュニケーションと、何もやる気がしないと感じたこととの関連



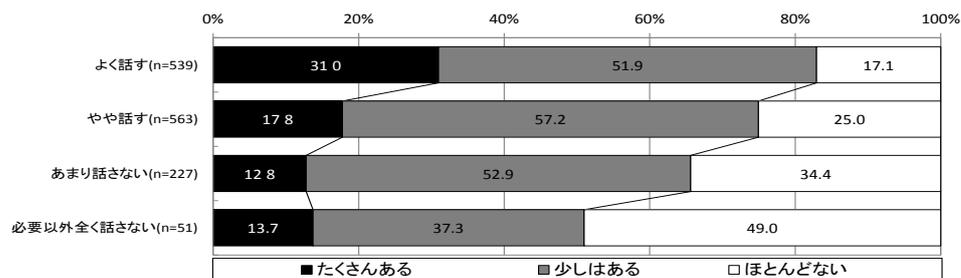
夫婦間コミュニケーションと、死にたいと思ったこととの関連



夫婦間の会話と老後の楽しみの関連

・妻とよく話す男性は、全く話さない者に比べ、定年後の楽しみ・計画がある者が増加する傾向が見られる。

夫婦間コミュニケーションと、定年後や老後の楽しみや計画の有無との関連

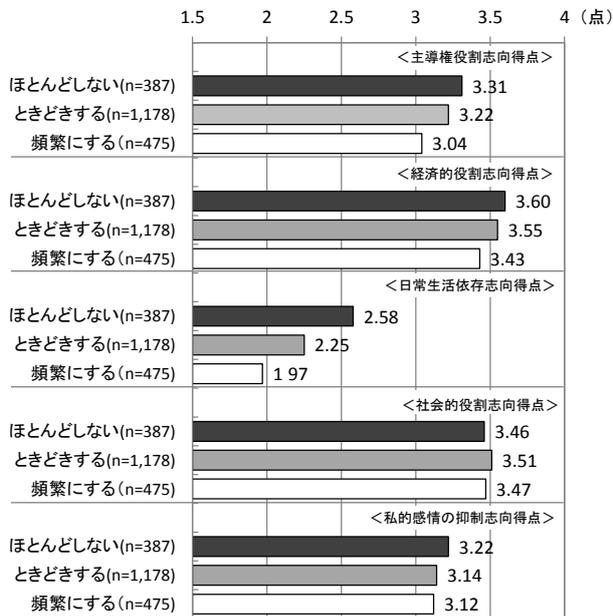


② 家事や育児について

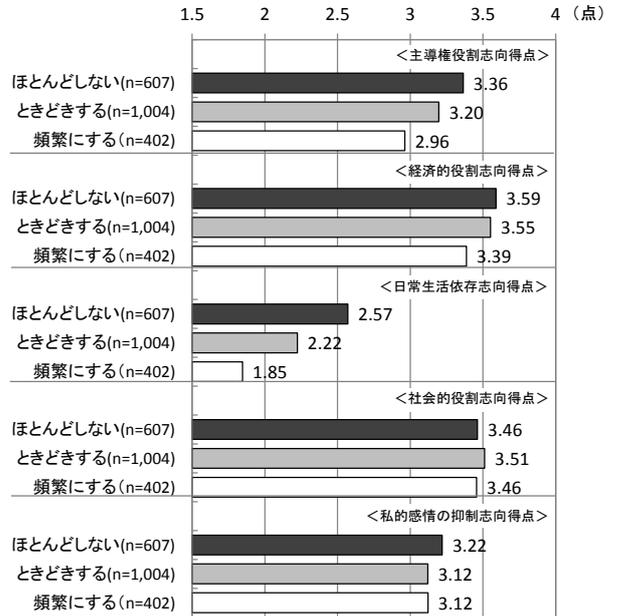
家事（買い物や洗濯をすること）

・家事を頻繁にする男性は、「主導権役割志向」や「日常生活依存志向」が弱い傾向が見られる

男性の買い物と性別役割分担意識に関する志向との関連
(分析対象：既婚者)



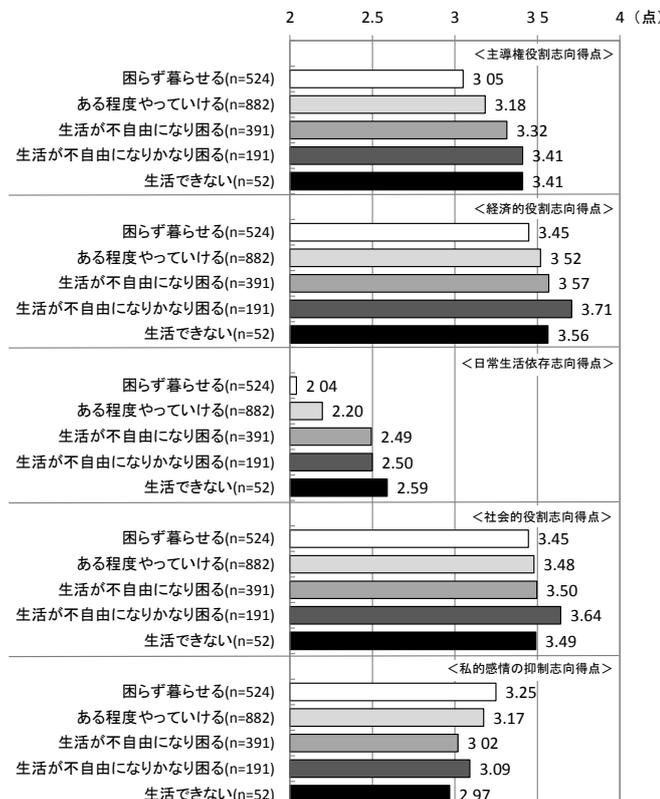
男性が家族の洗濯物を干すことと性別役割分担意識に関する志向との関連 (分析対象：家族と同居している既婚者)



妻が不在の際の生活の困難度 (既婚男性)

- ・妻がいないと生活に困ると感じるものの少ない男性は、「主導権役割志向」や「日常生活依存志向」が弱い傾向が見られる。

男性の妻が不在時の生活の困難度と性別役割分担意識に関する志向との関連

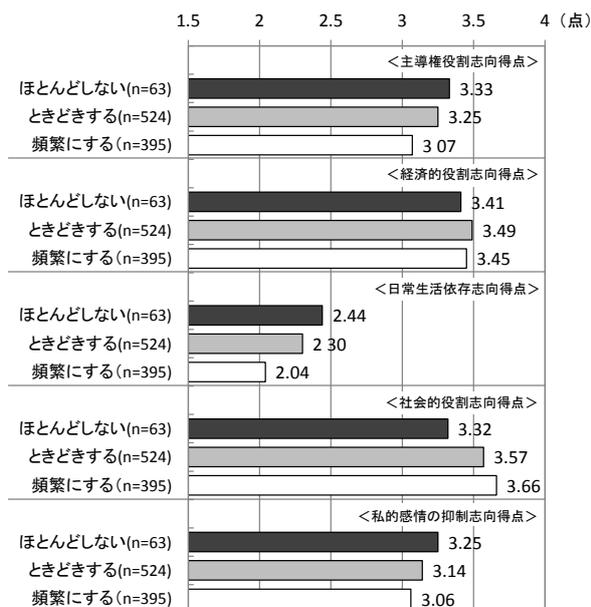


子どもの世話の頻度

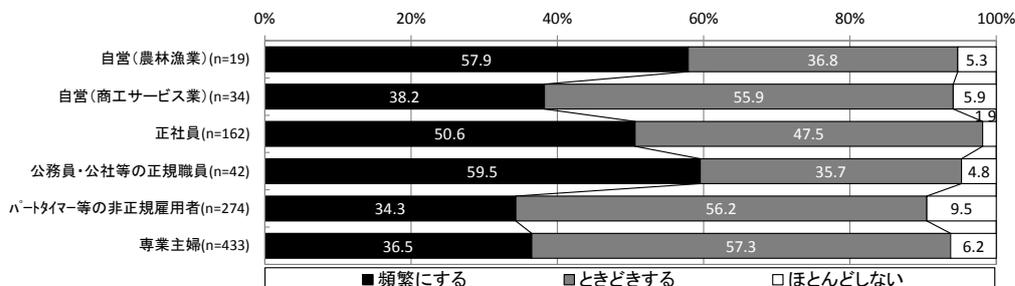
- ・子どもの世話を頻繁に行う男性は、「主導権役割志向」や「日常生活依存志向」が弱く、「社会的役割志向」が強い傾向が見られる。
- ・妻の就業形態とも関連があり、妻が「自営（農林漁業）」「正社員」「公務員・公社等の正規職員」の場合には、子どもの世話を頻繁にする傾向が見られる。
- ・なお、妻が「パートタイムの非正規雇用者」の場合と「専業主婦」の場合では、子どもの世話を頻度、ほとんど差が見られない。

男性の子どもの世話の頻度と性別役割分担意識に関する志向との関連

(分析対象：高校生以下の子どもがいる既婚者)



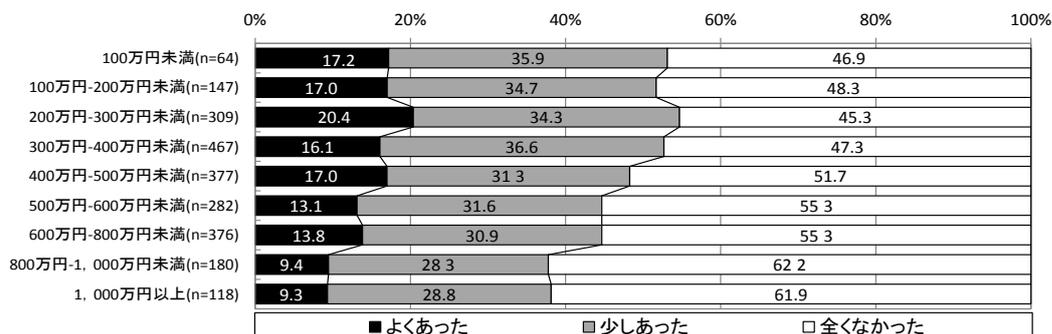
男性自身の子育ての頻度（妻の就業形態別）



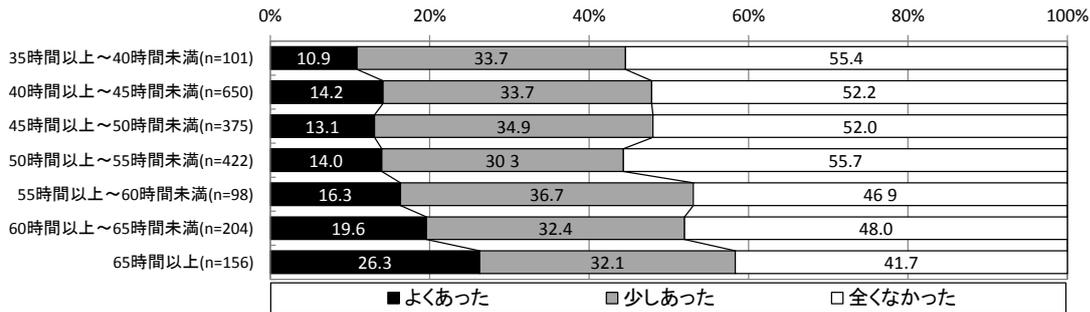
③ 仕事をやめたいと思ったこと

- ・収入が低くなるほど、仕事をやめたいと思ったことがある者が増加する傾向が見られる。
- ・労働時間が長いほど、仕事をやめたいと思ったことがある者が増加する傾向が見られる。

男性自身が仕事をやめたいと思ったこと（男性の収入別）



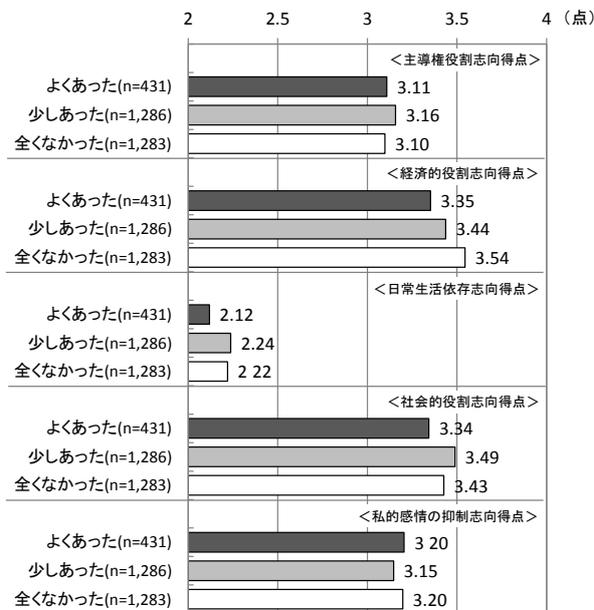
男性自身が仕事をやめたいと思ったこと（男性の労働時間別）



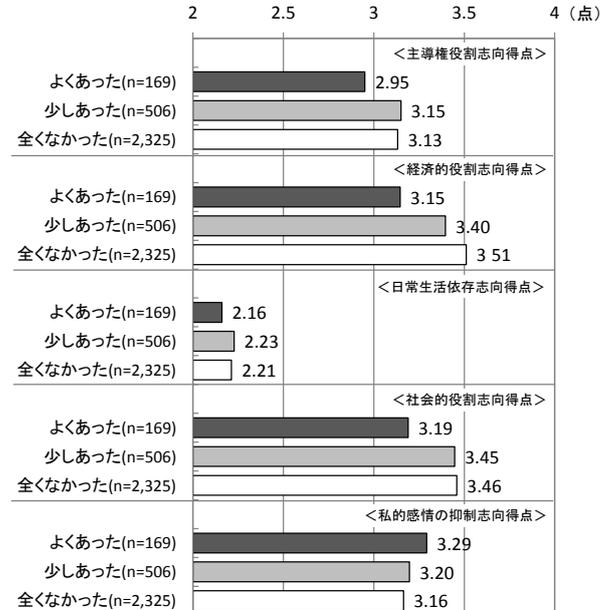
④ 「何もやる気がしない」や「死にたいと思ったこと」

- ・「何もやる気がしない」、「死にたい」と感じたことがよくあったと回答した者は、経済的役割志向が弱い傾向が見られる。

男性が何もやる気がしないと感じることと
性別役割分担意識に関する志向との関連

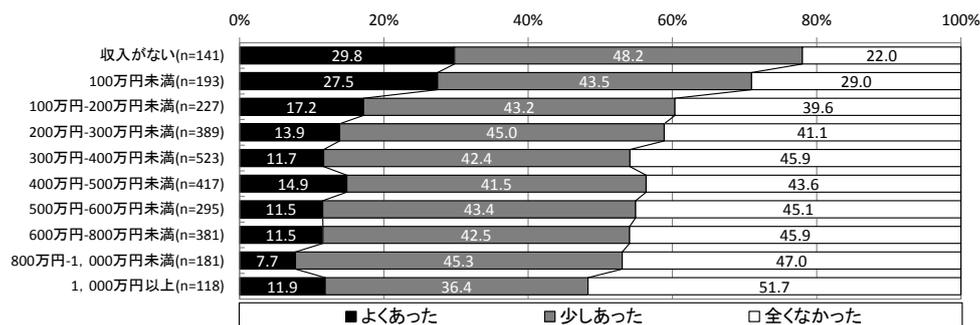


男性が死にたいと思ったことと
性別役割分担意識に関する志向との関連

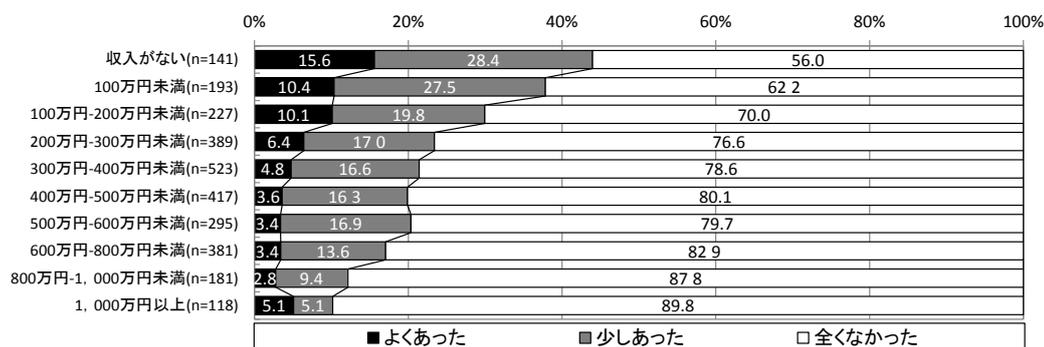


- ・収入が低くなるほど、「何もやる気がしない」、「死にたい」と感じたことがあったと回答した者が増加する傾向が見られる。

男性自身が（最近3か月間で）何もやる気がしないと感じたこと（男性の収入別）

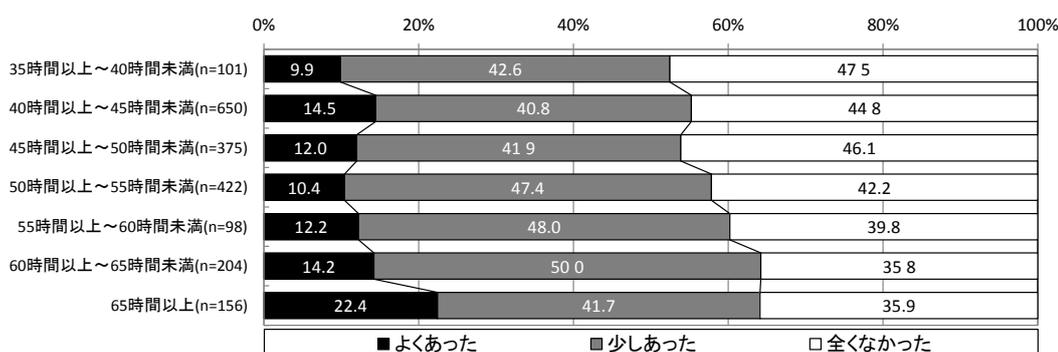


男性自身が（最近3か月間で）死にたいと思ったこと（男性の収入別）

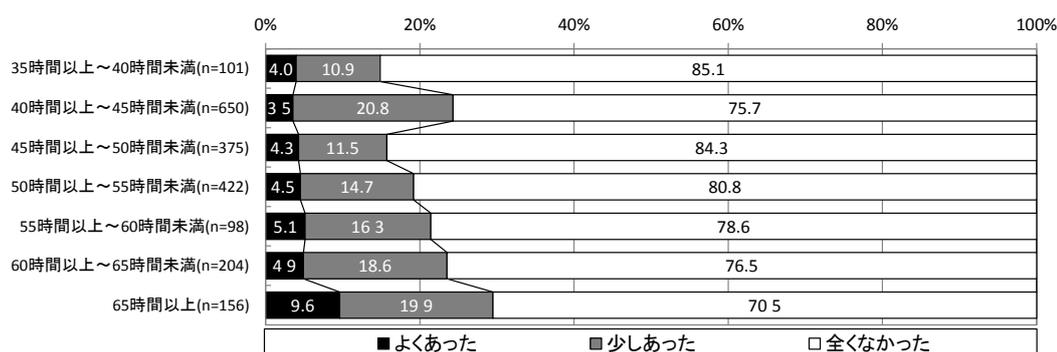


- ・労働時間が長くなるほど、「何もやる気がしない」、「死にたい」と感じたことがあったと回答した者が増加する傾向が見られる。

男性自身が（最近3か月間で）何もやる気がないと感じたこと（男性の労働時間別）



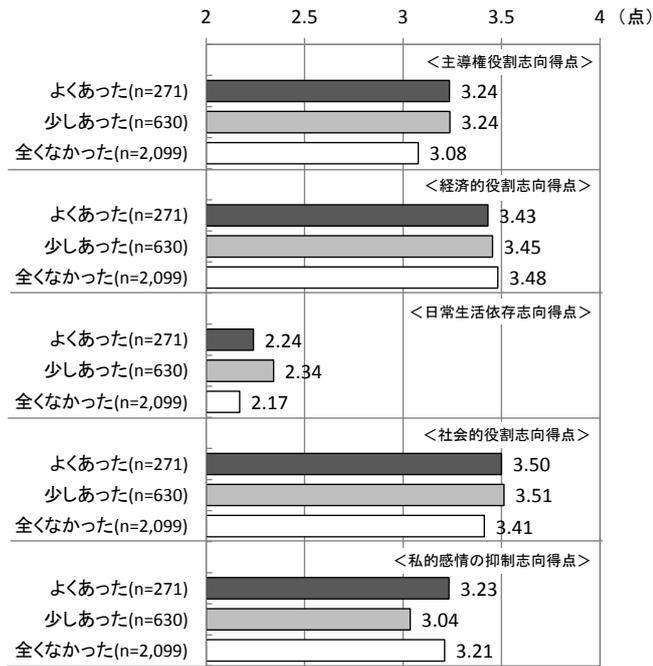
男性自身が（最近3か月間で）死にたいと思ったこと（男性の労働時間別）



⑤ お酒を飲むまいと思っけていても飲んでしまうことや飲まないで眠れないこと

- ・そのような経験があったと回答した者は、「主導権役割志向」が強い傾向が見られる。

男性がお酒を飲むまいと思っても飲んでしまうことや飲まないで眠れないことと
性別役割分担意識に関する志向との関連



(参考) 「5つの志向性」と関連する質問項目

主権役割志向	妻や恋人には、できれば自分の意見に従ってもらいたい (結婚したら) 妻には自分の(家の)習慣(やり方)に合わせてほしい 妻や恋人が自分の思い通りにならないとイライラすることがある 家事は、主に妻にしてほしい 結婚生活の重要事項は妻ではなく自分が決めたい 家庭のこまごました管理は妻にしてほしい 父親が仕事中心に生活することは家族の幸せにつながる 自分の親に介護が必要になったら、介護は妻にしてほしい 男同士では、自分と相手との上下関係を意識して接している
経済的役割志向	(結婚したら) 家族を養い育てるのは自分の責任である 子供に手がかかるうちは、妻に働いてほしくない(ほしくなかった) (結婚したら) 一家の大黒柱は自分である ※(結婚したら) 妻にはできるだけ稼いでもらいたい (結婚したら) 家族のために、仕事は継続しなければならない
社会的役割志向	仕事で業績を上げ評価されたい 仕事では競争に勝ちたい ※たとえ収入が低くても、興味を持てる仕事をしたい
私的感情の抑制志向	※悩みがあったら、気軽に誰かに相談するほうである ※自分の素直な気持ちを他人によく話すほうである ※他人に弱音を吐くことがある
日常生活依存志向	妻が仕事を持つのは、家族の負担が重くなり、よくない 家族の洗濯物を干すことは、自分がするような仕事ではない スーパーマーケットや商店で野菜や肉、魚などを買うことに抵抗がある

※ は逆転項目(男性の性別役割分担意識とは逆の形で質問をしている項目)